



県立川根高等学校では1月19日、緑のふるさと協力隊員として本町に1年間派遣されている中野千江さん（札幌市出身）を招き、同校体育館で講演会を開いた。

午前8時半ごろから始まった講演には全校生徒が参加。千江さんは、本町の印象や活動を通して得たことなど、熱心に語りかけた。講演後は、生徒からの質問が相次いだ。本号巻末特集は、中野千江さんが、皆さんに贈る「ラスト・メッセージ」。

緑のふるさと協力隊とは、NPO法人地球緑化センターが実施する事業の一つです。若者を1年間農山村に派遣し、まちづくりなどのお手伝いをします。

派遣前に実施される研修では、どの隊員もやる気に満ちあふれた顔ばかり。最初は「自分が町を変えるんだ！」

という強い意気込みで、派遣先へ乗り込んでいきます。でも実際にその町で生活してみると、隊員が想像しているほど農山村は困っていない、というか苦しんでいない。みんなパワーとエネルギーにあふれ、生き生きと暮らしていることに気付くんです。

自分が川根本町に派遣された当初は、なぜ派遣されたのか、自分に何ができるのかと戸惑うこともありましたが、でもここで暮らすうちに、次第に「自分もこの町の人のような、大らかな人間になりたい」と、自然に思えるようになってきたんです。

そして、「この町の人のこと、この町自体のことを、もっと多くの人に知ってほしい」と思うようになり、自分ができるのかと、川根茶も、人の温かさも、どれもこの町にしかない良さです。それを町外の人に教えてあげる。ここはいいところだよと紹介してあげる。それが、わたしの仕事です。

千江の輪。

最終話

ちがあるから乗り切れるんだと思います。

皆さんもぜひ「自分に一つだけのもの・本当にやりたいこと」を見つけてください。きつと、周りに左右されず、何事も苦にならずに、努力していけると思っています。

―熱心に聴講する生徒たちを前に千江さんは、自身が1年間に経験したことを交えながら、約30分にわたって語りか

けた。千江さんは最後に、生徒たちにこう話して講演を締めくくった。

この町に来て、すごくいいなあと思ったこと。それは「人と人とのつながりが濃い」ということです。

幌で一人暮らしをしていたんですが、自宅にいと誰とも会話せずに1日が終わることも多くありました。自分の部屋の上下左右にどんな人が住

んでいるのかも知りませんでした。この町では、知らない人が気軽にあいさつしてくれます。何げなく歩いていても、誰かが声をかけてくれます。

「特に用はないんだけど」と言いながら様子を見に来てくれたり、玄関先に野菜を置いていってくれたりする人がたくさんいます。

地域の人に見守られていることが、とてもうれしく思っています。夏には、地区の行事に参加

させてもらい、そこで伝統が受け継がれていく様子を目の当たりにしました。

年上の人や年下の人たちに伝統・文化を教え伝えていく。地域の人がみんな地域を誇りに思っています。

わたしが住んでいる札幌市は、人はいっぱいいるけれど、人と人とのつながり、コ

ミュニケーションが薄い街です。人の温もりを感じることに少ないのです。

皆さんは、これからそれぞれの目標に向かって歩いていくことでしょうか。この町を離れる人もいます。

ここでは当たり前のこと、人とのつながりや温もり。川根本町の良さ。町の外に出たとき初めてそれに気付くのかも知れません。

川根高等学校 深沢秀明校長

―熱心に聴講する生徒たちを前に千江さんは、自身が1年間に経験したことを交えながら、約30分にわたって語りか

けた。千江さんは最後に、生徒たちにこう話して講演を締めくくった。

この町に来て、すごくいいなあと思ったこと。それは「人と人とのつながりが濃い」ということです。

3年2組 荒波祥吾さん

わたしは中野千江さんに、どうすればこの町はもっと良くなるのかと尋ねてみました。

わたしたちが普段何とも思っていないようなことでも、改めて考えてみると「あれも良さなのかも」と思える場面がたくさんあることに気がきました。

わたしは、これからそれぞれの目標に向かって歩いていくことでしょうか。この町を離れる人もいます。

